

第 35 回 猪名川自然環境委員会 議事要旨

1. 日 時 令和 8 年 3 月 18 日 (水) 15:00~17:00
2. 場 所 大阪府立男女共同参画・青少年センター (ドーンセンター)
3. 出席者 委員：川崎委員 (欠席)、竹門委員、田中委員、服部委員、平井委員、松井委員 (WEB)、
村上委員、森下委員 (委員長)
猪名川河川事務所：嶋本事務所長、森下副所長
新地建設専門官、浦西建設専門官
(工務課) 福本工務課長、大西工務課専門官
庶務：いであ株式会社 兵藤、中平、伊東

4. 開 会

5. 議 事 (1) 工事箇所 の 環境面からの評価
(2) 猪名川自然再生事業報告書 (案)
(3) 河川水辺の国勢調査を行う上での猪名川における補足事項 (案)
(4) その他：カララヨモギの移植他

6. 結 果

(1) 工事箇所 の 環境面からの評価

1) 猪名川東園田・今在家・利倉地区河道掘削工事等

(評価結果)

- 評価結果は B 評価とし、過年度に整理された環境配慮事項 (汚濁防止対策等) に基づき工事を実施することとする。

(特定外来生物)

- アルゼンチンアリが伊丹空港付近で確認されており、現在は猪名川と藻川の間まで拡大しているため、今後の分布状況に留意する必要がある。
- 河川敷では水際を好むなど生態的特性があり、初期防除の対応が重要である。

(樹木伐採の方針)

- 伐採履歴を踏まえ、流程毎に重要種の確認状況等を整理・評価していくことが今後重要である。
- 樹高と樹齢の関係に加え、胸高直径との関係も整理することが望ましい。

(2) 猪名川自然再生事業報告書 (案)

(猪名川自然再生の位置付け)

- 猪名川自然再生の意義や背景として、河川整備計画や治水・利水・環境の観点に関する記述が不足しているため、これらを明確に位置付ける必要がある。また、本検討が猪名川直轄管理区間を対象としたものであることを明記する必要がある。さらに、銀橋開削等の河道改変により河川環境が大きく変化する可能性があるため、その影響を踏まえた整理が必要である。

- 魚道整備と河原・水陸移行帯の再生の記載順序については、主従関係を踏まえ見直す必要がある。また、「移動経路、河川地形・生息場、土砂移動の3つの要素」という表現は不明確であり、整理・修正が必要である。

(各委員の専門の視点からの事業報告書のポイントの記載)

- 各委員より、専門の視点から事業報告書のポイントを文章で記載していただきたい事業報告書の冒頭部分については、委員長による記載とすることが望ましい。

①河原・水陸移行帯の再生

(自然再生事業の評価)

- 猪名川では自然再生事業により一定の再生効果が確認されたが、流量条件等の影響により、一定期間経過後には再生力に制約が生じる可能性があり、人為的な関与の必要性についても記す必要がある。
- 自然再生事業のまとめにあたっては、委員会で議論されてきた環境目標やキーワードが十分に反映されておらず、自然環境の要素を具体的に記載する必要がある。

(個々の事例の結果とまとめの中間的な総括)

- 個々の事例について事実と結果は整理されているが、各地区の成否や要因を整理した中間的な総括が不足しており、まとめに至るプロセスを明確に示す必要がある。

(将来変化と治水への影響)

- 銀橋の開削により上流からの土砂供給の変化が想定され、河川環境に大きな影響を及ぼす可能性があることから、今後の影響について課題として整理する必要がある。

(物理環境と生物の関係)

- 河原環境の再生により、緩傾斜の水陸移行帯が形成され、下流ではカニ類・エビ類等への応答が見られており、これらは土砂移動と密接に関係していると考えられる。河原・水陸移行帯の再生による魚類の生息状況の変化については、早瀬・淵の面積と礫河原の面積を対応させることで関係性の把握が可能である。

(河原・水陸移行帯の再生による昆虫類に対する効果)

- 生物は場の形成後に時間差をもって出現するため、評価にあたっては時間的な遅れを考慮する必要がある。昆虫については、水陸移行帯や裸地の形成による効果が現れている可能性がある。

(外来種への対応)

- 外来種は近年の調査で増加しており、対策が必要な状況にある。

(河原環境の指標種の再生)

- 植物については礫河原の場までは再生されるものの、その後の生物の再生には課題がある。
- インパクト・レスポンスの関係分析について、鳥類の指標種となるシギ・チドリ類は再生前後の時系列を含めた整理が必要である。

②縦断連続性の回復（魚道）

(魚類調査・耳石分析)

- 耳石調査では、揖保川漁協の鮎種苗生産施設「あゆ・赤ちゃんセンター」由来の放流アユの分析の有無を確認するとともに、藻川での産卵や汽水域・沿岸域との関係についても留意する必要がある。

- 瀬・淵構造は土砂移動と密接に関係しており、ワンド・たまり等の連続的な生息場が形成されることで、イシガイ科二枚貝やタナゴ類の再生の可能性があることから、土砂移動の重要性を記載する必要がある。

(調査等のデータ整理)

- 放流アユについては重量だけでなく、個体サイズ等から個体数の算定を行う必要がある。
- 底生動物については、指標種・重要種・外来種に限定した整理では情報が不足するため、スジエビやヒメヌマエビ等を含めた他種についても掲載する必要がある。また、過年度の情報についても整理・掲載が望ましい。

(連続性の定義・整理)

- 「魚類の生活史」に関する記載については、縦断方向に加えて、本川と支川の連続性を考慮した構成とし、内容を整理する必要がある。

(3) 「河川水辺の国勢調査を行う上での猪名川における補足事項（案）」

(河川水辺の国勢調査 全体計画)

- 河川水辺の国勢調査に関する意見については、委員会での議論に限らず、必要に応じて書面での対応とすることが望ましい。
- 河川水辺の国勢調査の底生動物の採取場所をドローン等で撮影して、情報量を多く記録していただきたい。
- 魚類調査については、従来の調査結果と DNA 調査結果の比較整理を行い、選定方法と結果の整合性を確保する必要がある。
- 魚類の分類において課題となるヨシノボリ類については、DNA で判定できないため、将来的な解析を見据えたデータの蓄積・保管が重要である。

(4) その他

(カワラヨモギの移植)

- カワラヨモギの移植に関する検討内容について説明を行った。

7. 閉 会

以上